

教員が授業を行う際に準備するものの一つに「ワークシート」なるものがある。プリントなどと称される紙による配布物の中で、児童生徒に書き込ませるなどの学習活動（作業）を伴うものである。

トーク・チョーク・ワークという言葉がある。よくない授業を揶揄したものである。ワークはワークシートのことである。中身を工夫しないと、揶揄の対象となる。ワークシートを使えばそれでいい、ワークシートは必ず使うものという前提に立っているようだと言っている。

今まで、数多くの国語の授業を参観させていただいた。何とワークシートを使った授業が多いことか。残年ながら、これぞワークシートというものにお目にかかることは少ない。多くは、A4判で四角の枠がいくつかあるだけである。ワークシートでなくてはならない必然性がない。ノートで十分である。授業を見ていると、ワークシートの枠を突破して書いている子もいる。中には、無理して枠内に収めようと苦慮している子もいる。

参観授業後の協議会などで、私は授業者に聞いたことがある。「今日の授業で使ったワークシートはなぜA4なのですか」「ワークシートの記入欄である枠の大きさは、どのようにして決めているのですか」「授業で使ったワークシートは、最終的にどうなるのですか」

ほとんどの授業者は答えられない。なぜなら考えていないからである。A4も枠の大きさも、授業者である教員の都合である。私は「A3の方が、たくさん書けますよ」と言ったりする。授業で使われたワークシートはいったいどこに行ってしまうのか。ノートに貼り付けたり、国語ファイルに綴じ込むならまだいいが、結局、どこかにいってしまうケースもある。

「あとでノートに貼っておきなさい」という先生と、最初からまわりをカットして、そのままノートに貼れる大きさにして配布している先生とでは、大きな差がある。「あとでファイルに綴じておきなさい」という先生と、最初から二穴パンチで穴をあけてから配布している先生とでは、これまた大きな差がある。小学生であれば、授業時間内にノートに貼らせたり、ファイルに綴じらせたりする先生もいる。学習訓練の一つである。

多くの子供は、自分のノートからはみ出ているワークシートを見るのは嫌なのである。いちいちノリで貼るという作業も面倒くさい。また、たいていの家には、二穴パンチなどない。教室にあったとしても、わざわざ並んでまでして穴を空けるのも面倒くさい。

ひと味違ったワークシートを使う先生は、シートが構造的になっている。子供の思考を補助するようになっている。あるいは自由に書き込めるようになっている。書き込む欄の大きさは、自分が実際に記入してみて決めている。これも教材研究の一環である。

ワークシートは、小学校でも中学校でも高校でも見られる。この授業では、こういったねらいで、こういう活動をさせたいから、ワークシートがいいという場合があるのは事実である。だが、基本はノートでいい。ワークシートは、それを使う必要性、必然性があれば使えばよい。世の中に出ると、ノートの類いはあっても、ワークシートはない。

多くの先生方は、授業で何か工夫しなければならないという強迫観念からワークシートを使っているのではなからうか。あるいは、使うのが当たり前、多くの先生方が使っているからと思っているのではないか。教科書とノートだけでは、何の工夫もしていないような気になってしまうのではあるまいか。

提案がある。ワークシートを使うのが当たり前のようにしている先生方は、一度、一定期間ワークシートから離れてはどうだろうか。自分にワークシート禁止令を出すのである。そうした方が授業の質的改善や深い学びに近づくように思う。